第四章　女筆手本類の筆者

一、大江資衡が選んだ女能書

近世の女筆手本類のうち女性筆者によるもの（女筆手本・女筆用文章・女筆往来物）は全部で一二〇点（改題本は別に数えた）である。これを書家別に見ると、長谷川妙躰が二三点（一九・二％）で他の追随を許さない。続いて、居初津奈が一二点（一〇％）、沢田吉が九点（七・五％）、さらに小野通が六点（五％）、春名須磨が五点（四・二％）、長谷川品が四点（三・三％）、窪田やすが三点（二・五％）、長谷川貞寿・長谷川縫・田村よし尾・万屋かめがそれぞれ二点（一・七％）である。

このうち津奈を除いた上位三人の妙躰・お通・お吉は、柳亭種彦が『足薪翁記』「浄瑠璃雑考[1]」の中で、

妙貞尼、沢田お吉、此於通、寛永以後女の三能書といへり。

と注記するように、（江戸後期には）近世を代表的する女流書家と見なされた。

しかし、大江資衡（玄圃[2]）によれば、小野通・沢田吉・長谷川妙躰の三人を女筆の大御所とする認識は江戸中期（の少なくとも京都）にはなかったことが分かる。大江は、明和五年（一七六八）刊『女学範』や安永六年（一七七七）刊『女早学問』などで知られるが、別に『名媛墨妙集』という幻の著作がある。同書は未発見だが、『女学範』の巻末広告に、

名媛墨妙集　古今女筆手本　玄圃輯閲　三冊

とあり、おおよその見当がつく。そして、この『名媛墨妙集』に集録された古今の女筆は恐らく大江が『女学範』等で紹介したものであったに違いない。大江が女筆に関して一見識を有したことは『女学範』でも明らかで、彼自身が相当数の女筆手本類を所持していたと想像される。『女学範』には、今日全く伝本のない女筆手本も散見され、われわれが到底知り得ないような情報を多く含んでいるからである。

その『女学範』の上巻末尾「書学（てならひ）」項には、「むかしよりいまにいたりて、ふてのみちにたへなる」日本の女能書として光明皇后以下三六人とその作品二七点が紹介されている。このうち、近世の女流書家と作品は次の通りである。なお〈　〉は『女学範』の注記で、＊印は『近世人名録集成』による補足である。また作品名は原文に即したため、巻末「刊行一覧」の書名とは若干異なる。

◎**小野通**〈太閤秀吉の政所・淀殿につかへたる人也〉　『四季女文章』『女筆春の錦』『和歌往事集[3]』

＊「号、身葉子。不知没年。（墓所、江戸）金杉町新屋敷」（二巻二六三頁＊該当箇所。以下同様）

＊「小野氏於（ヲ）通ト云。信長公ノ侍女。才女ノ名アリ。又、書ヲ能ス」（四巻三三五頁）

◎**佐々木照元**〈志須摩（ママ）の女〉　『千字文』『三体詩絶句』

＊「志津磨ノ女。晦山ノ妹ナリ。書法ヲ父ニ受テ筆力遒健（しゅうけん）ニシテ大イニ称誉セラレ其名甚高ク求メテ請フモノ多シ」（四巻二七八頁）

◎**古屋潤照**〈古屋氏。粟津某母〉

◎**長谷川妙躰**〈筆海子と号す。京都人〉　『女筆指南集』『女筆さゞれ石』『女筆難波津』

◎**長谷川貞**[4]　『女筆雲井鶴』『女筆しの薄』

○**長谷川富**

◎**長谷川志奈（品）**　『女筆みよし野』

○**長谷川佐世（さよ）**

◎**植村尾上（をのゑ）**

○**居初津奈（ゐそめ）**　『女実語教』

◎**林蘭**〈大坂の人〉　『女教文章鑑』

○**荒木慈忍**〈伊勢の人〉　『女筆初音の道』

◎**高木佐世**　『女筆小倉手本』

◎**窪田津留**〈大津の人〉　『女今川姫鑑』

○**沢田吉**　『女筆浅香山』

○**宮城忠蔵母**〈名は源[5]〉

◎**垣内須恵**　『女筆秋津風』

◎**春名須磨**〈大坂の人〉　『女筆色みどり』『女文章唐錦』

○**宮崎競花**[6]　『女筆芦間鶴』

○**富岡恵輪**（ゑりん）

◎**渤海鼎**（ふかみ）〈名は鼎。字は麗華〉　『千字文』

＊「渤海氏　名麗華。渤海春吾[7]娘」（一巻七頁）

＊「渤海氏　名麗華。大宮今出川下ル町。渤海氏女」（一巻一八頁）

◎**龍貞**（りうてい）〈初の名は菊〉

＊「（龍草廬の）妾、菱氏。名、貞香。字、芽卿。小菊ト号ス。河内人。草書ヲ善クス。又、詩歌ニ巧ミナリ」（四巻七七頁）

○**龍貴**（たか）

○**龍輝**（てる）[8]

＊「草廬女子」（四巻七八頁）

◎**平信好**（のぶよし）[9]**母**〈名、登免（とめ）〉

○**長谷川**[10]**縫**　『女筆都の春』

注　書家名を明らかにしないが、このほか『女今川百花香』（伝本なし）と『女五常訓』（坂本源兵衛作）の二本も女筆手本として掲げる。

この『女学範』はのち簡略化され、安永六年（一七七七）に『女早学問』と題して刊行されたが、やはり上巻に「書学（てならひ）」の一項を設け、女能書二三人、女筆手本類九点を載せる。前記のうち、◎印が『女学範』と『女早学問』の双方に取り上げられている人物で、○印が『女学範』のみに見える人物である。

そして、『女学範』から『女早学問』への改編の結果、沢田吉の名と彼女の作品は削除され、より厳選された女筆手本として、小野通の『四季女文章』、長谷川妙躰の『女筆指南集』、長谷川貞の『女筆雲井鶴』、垣内須恵の『女筆秋津風』などが紹介されているのである。

この事実は、いわゆる「寛永以後女の三能書」が当時一般的でなかったことを物語るもので、女筆手本に通じた大江には「三能書」の認識がなかったわけである。

いずれにしても、以上の「書学」の記事は女筆について貴重な情報を含むものである。それだけに『名媛墨妙集』の内容が気になるが、残念ながら本書はまだ見つかっていない。

これら女流書家たちの出自や生涯についてはほとんど知り得ない。ただ、女子用往来には次のような若干の記事が散見される。どこまで史実かは不明だが、中には看過できない記述もある。

○小野通[11]

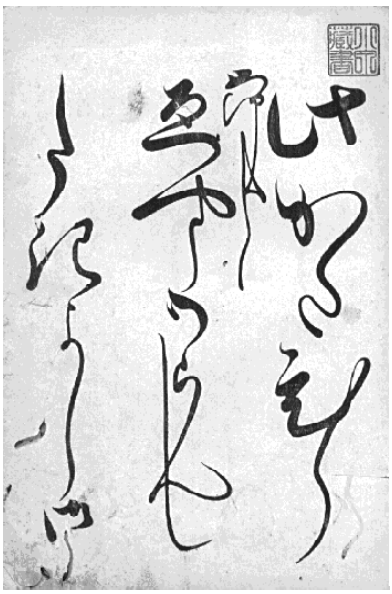
享保一四年（一七二九）刊『女五常訓』頭書「日本女能書[12]」には次のように記す。

小野（おの、）お通（づう）

おのゝおづうは、漢（かん）がく・呉学（ごかく）に通（つう）じ、もつとも和書（わしよ）にわたりて、はくがくたさいなり。よしつねあづまくだりを十二だんにつくり、上るり御ぜんのことをのべたり。今（いま）、是（これ）をつゞめて五だんの上るりといへることのはじめなり。さいちある事をこれにてしるべし。それのみにあらず。しゆせきにめうをゑて、たぐいなき者也。今、こうづの人のしたいて、ぢくの物となす。

また、延享元年（一七四四）刊『女文台綾嚢』前付の「小野於通が伝」にも同様に次の記事を載せる。

小野おづうは、山城の国、小野何某が女なり。むまれ付、艶にうつくしきのみならず、手跡世に類なく、ひろく和漢の文にわたりて才知ならびなき名女也。太閤秀吉公の政所淀殿に給仕せり。ある時、おつうが才能あるをもつて、「草紙書て参らせよ」との仰事あり。おづう思ひけるは、「貴命誠にいなみがたけれども、さうそくにそれぞと思ひよるかたもなく、かつ、其いにしへに女にて文詞のめてたきを残せし紫式部が『源氏』の巻々、清少が『枕草子』の種々妙なる筆力をふるひて企及ぶべきにも非す。又、かれに似よりたる事柄を書のべんも栄々しからず。今めかしく、にげなき事を」と思ひめぐらして、「十二段」といふ草紙を書て奉りける。淀殿、殊更に感じ給ひて、其文詞に節を付て歌はしめ給ふ。これ、浄瑠璃の始也とぞ。又、近代に板行せる『春の錦』と題せる文手本は、おづうが筆の跡なり。女子たるものは、おづうか才知を請ねがふべきなり。



四季 女文章

前者の記事は、当時よりお通の軸物が好事家に好まれたことにも触れている。また、後者は通が才色兼備の優れた女性として描かれるなど、一層伝説めいた紹介となっている。

ちなみに、早稲田大学図書館蔵本中に元禄四年（一六九一）刊『四季 女文章』下巻一冊がある。原題簽を存し、その下方に「小野のおづう」と二行で書かれている点は家蔵本と変わらないが、早大本には次のような興味深い書付を添付する。記載内容から江戸中期に本書を所蔵していた旧蔵者の書付らしいが、それによると、ある時濃州大垣で、彼が中村某という知人に本書をなかば開いて見せたところ、中村氏が「この手本の筆者を当ててみようか」と言うので、「これは面白い、それでは一体誰の筆跡か」と問うと、中村氏は「大垣殿中にこれに似た女筆の散らし書きがあって、それは信長公の腰元の筆跡と聞いている。その女性ではないか」と答えたので大変感心した、従って、本書は小野通の真筆に違いないだろうと記してある。

この逸話から知れる事実は、先の『女文台綾嚢』の記述通りに小野通の筆跡を求める者が多かったことと、小野通といえば「信長公の腰元」という一般認識が存在していたことである。さらに早大本には朱筆で次のような注書きがされており、この旧蔵者が『女文台綾嚢』とほぼ同時代の人物らしいことも分かる。

或書に大坂高麗橋一丁目、ふぢや浅野弥兵衛

女筆春の錦 小野おつう筆　一冊

と有。此本別本か、此本歟。別本なるへし。板元相違候也。

この記載も小野通への関心の高さを示すものだが、その推測は五〇％の正解といえよう。巻末の「女筆解題」にも触れたが、『女筆春の錦』は『四季 女文章』と大半（収録書状の八七％）が同じで、収録順序を改めたものであり、完全な別本とは言えないからである。『女筆春の錦』の正確な刊年は分からないが、書籍広告から明らかに享保一九年（一七三四）以前刊で、板元は書付の通り藤屋弥兵衛である。

享保期といえば長谷川妙躰の全盛期であったが、そんな時代でも小野通の人気は衰えることはなかったのである。

○佐々木照元[13]

先の『女五常訓』の「日本女能書」には、佐々木照元について次のような逸話を掲げる。

てるもとは、さゝきうぢのむすめ。ちゝのしづまがひつほうをゑたり。ひつりよく、女の筆とは見へず。『千字文』あるひは古文のぜんご「せきへきのふ」をかき、石摺となして世にひろむる。ちゝがひつほうをつたふといへども、七十二てん、みなふでのたてふしかはりて一ふうをなし、すみいろあいをいだす。つよきこと、羲之が石に

いるといふるも又とをからず。

また、明和九年（一七七二）刊『女用文章糸車』巻首[14]に挿絵とともに次の一文を載せる。

佐々木照元は、近代書法をもつて一家を建たる佐々木志津摩の娘なり。名をば「おてる」といへり。父の志津摩、常に教訓して云。「唐土の祭琰は、女ながら父祭邕が書法を伝へて今に至るまで其名誉を遺せり。汝、書家に生れて書を能せずんば、我門の家風を堕さん」と教訓す。これによつて、照元日夜学びて、遂に能筆の誉今の世に高し。『千字文』、又は前後の『赤壁賦』を書て今世間にあり。近代の能筆なり。

以上の二例は女子用往来によるものだが、照元の記事は男子一般の往来物にも見られる。すなわち、文化四年（一八〇七）、江戸・大阪五書肆刊『新童子往来万福大成（内題「新童子往来万代宝蔵」）』の前付記事「八書仙伝」である。この記事に紹介されている能書は、藤木甲斐守・佐々木照・南谷阿闍梨・烏石山人・松花堂・細井広沢・桑原為渓・大雅堂の八人で、女流書家は照元のみである。その全文を引いておこう。

佐々木照

剃髪して照元、字は由也と云へり。縉紳家の諸太夫の妻女なりしが、夫にはなれて後、父志須磨が書法を伝へて出藍の聞へ高し。誠につよき筆力、石に入といへるに遠からず。

○長谷川妙躰

長谷川妙躰は近世女筆手本の最多作家であるが、にも関わらず、彼女に関する記事は、管見の限り次のただ一例である。先の『女用文章糸車』前付中の記事で、これ以外に妙躰の事跡についての既述は皆無に等しいから、極めて貴重である。

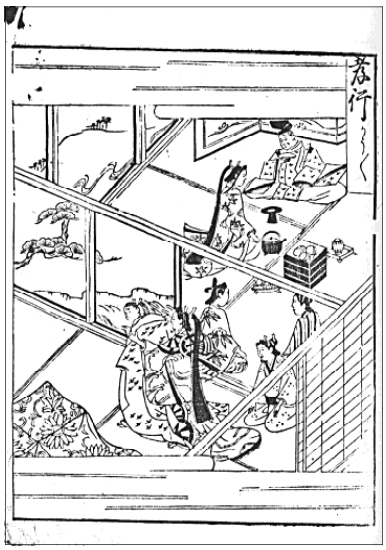
長谷川妙貞は其姓氏をしらず。いとけなきより御所に宮づかへせし時、妙喜尼といふ人に手跡を学ぶ事十二年なり。其後、御いとまを給はり、花洛の町に出て女子を集めて手跡を指南す。此時みづから妙喜尼の風を変して、一流の女筆を書出す。世に妙貞流と称し、例なき名誉を顕はす。近代にかくれなき能書なり。其書を評する者の云、「糸桜の春風に爛漫たるかごとし」といへり。

往来物に紹介されている近世の女流書家は以上の三人くらいで、他の女流書家についての記事は見出し得ない。つまり、女筆手本類の大勢の筆者たちは歴史に埋没しており、ほとんどが事跡の片鱗すら残していないのである。これは、一般の往来物の筆者である多くの男性書家にも言えることである。そして何より、女筆手本の半分近くがベールに包まれているのが現状であり、われわれが知り得る情報はごくわずかである。従って、女筆手本類の筆者像を立体的に描くことはほとんど不可能に近い。

だが、女筆手本史上最も重要な二人の女性、則ち居初津奈と長谷川妙躰については、作品群に残された断片的な手掛かりから若干の考察が可能であろう。この二人を抜きにして近世の女筆手本は語れないので、次項以下でさらに詳しく見ていくことにする。

妙躰略伝（女用文章糸車）

二、女性らしさを重視した居初津奈（人物と作品）



津奈自筆の挿絵（女教訓文章）

往来物を数多く手掛け、その歴史に重要な足跡を遺した女性のうち、筆頭にあげるべき人物は居初津奈と長谷川妙躰である。

妙躰は、従来の正統的女筆の信奉者には受容されないような独特な散らし書きで一書流をなした女流書家である。いわば近世の女筆ブームを巻き起こした中心的人物であって、執筆・板行された彼女の手本の数は二〇点以上と他の女流書家の追随を全く許さなかった[15]。

一方、居初津奈といえば、近世中期以降に多くの板種を生んだ『女実語教・女童子教[16]』の原作者として有名だが、そのほかにもいくつかの手本類を手掛けており、特に『女書翰初学抄』は後世の女用文章に多大な影響を及ぼした点、また津奈の事跡を知るほぼ唯一の記述を載せる点で極めて重要である。

女筆手本類の筆者として筆頭にあげるべきこの二人について、知り得る情報を駆使してその人物像や作品を探っていきたいと思う。

初めに居初津奈であるが、津奈には次の作品がある。

①貞享五年（一六八八）刊『女百人一首』二巻

②貞享五年（一六八八）刊『女文章鑑』二巻

③元禄三年（一六九〇）刊『女書翰初学抄』三巻　＊改題本に元文三年（一七三八）刊『女文林宝袋』一巻あり。そのほか類本多数。

④元禄七年（一六九四）刊『女教訓文章』二巻

⑤元禄八年（一六九五）刊『女実語教・女童子教』二巻

⑥延享四年（一七四七）刊『女文章都織』一巻　＊元禄年間作。

⑦宝暦五年（一七五五）刊『女通用文袋』一巻　＊現存せず。『明和九年書目』『江戸出版書目』による。『女文林宝袋』の改題本か。

⑧明和九年（一七七二）以前刊『女要今川教訓鑑』二巻　＊現存せず。『明和九年書目』による。

以上のうち、⑦、⑧の二点は原本未発見である。

ちなみに『国書総目録』著者別索引には、「居初」あるいは「居初つな（津奈）」の著作として、③の改題本『女文林宝袋』と、④、⑧のほかに、筑波大本『伊勢物語女日用文章』を載せる。最後の筑波大本は旧蔵者・乙竹岩造による仮題と思われるが、同書が⑥『女文章都織』と同じであることを確認済みである。また、『古典籍総合目録』著者別索引には「居初都音（つね）」の著作として③だけを載せる。結局、『国書』『古典籍』の両目録を合わせても①～⑧の半分しかあげていないが、何より彼女の代表作である『女実語教・女童子教』を津奈の作品としていないのは気になるところである。

これら津奈の作品はいずれも女子用往来に分類されるものであるが、江戸前期の女流書家では群を抜く作品数といってよい。そしてそれ以上に重要なのは、それぞれの作品が独創的かつ個性的であることと、その多くが自筆・自画であること、つまり本文を著したうえに版下の清書から挿絵までも一人でこなすという彼女の多才さである。このように当時稀にみる女性であったにもかかわらず、彼女を紹介したものはほとんどない。『国書人名辞典』を始めとする人名辞典にも津奈の事跡に関する記事は一つも見出すことができない。

それでは、上記作品中に手掛かりはないのか。

実は、津奈が自らについて述べた、わずかな記述が『女書翰初学抄』序文中に見える。その全文は次のようなものである。

天降（あまさか）る日那（ひな）に生（おふ）なる葛（くづ）の葉（は）のうらむる事（こと）は宿世（すくせ）のえにしぞかし。其道々（そのみちみち）のことわざを露（つゆ）しらまほしきには、且恋（かつこひ）

しきは都なめり。僕壮年の比、隙ある身となれり。よりて、日比の本意こゝなりと八重の汐路をしのぎて、今、此九重にいたりぬ。住事二十とせに及べり。つゐに思ふ道々をたどりて、其かたはしをうかゞひ、我身には足れりと是をたのしみ、隙行駒のあしなみを草のとざしにかぞへ、和国の風雅を味ふならし。爰にしれる人、一人の女子をもてり。是がために女文章のしるべならん事を書てよと望める事数多度なり。辞するに詞なくて、終に二札の文を書てあたへぬ。彼人よろこびて『女文章鑑』と名付り。それもいつしか書林の手に渡りて梓に彫て世に行へり。今一人の女子ありて、又此書を望めり。よつて、つたなき詞を綴て『女書翰初学抄』と名付。これ偏に初心のためなりといふ事しかり。　　居初氏女都音書之

この断片的な記事から大雑把であるが、居初津奈の動向について次のような推理が可能であろう。

「諸道を学ぶなら京都へ昇るのが一番であるという信念を持ちつつも、この私が田舎に生まれたのは前世からの因縁であろう」――そんな津奈の願望がかなったのは「壮年」の頃であった。そして本書を著した元禄三年（一六九〇）までの約二〇年間、この京に住み続けたという。仮に「壮年」を文字通り三〇歳頃とすれば、元禄三年で約五〇歳、逆算して、寛永一七年（一六四〇）頃の生まれとなる。これが正しければ、津奈の最初の著作『女百人一首』が出された貞享五年（一六八八）で四八歳位、生前最後の著作と思われる『女実語教・女童子教』が出版された元禄八年（一六九五）で五五歳位であったであろう。三〇歳頃京都へ移住した津奈は「隙ある身」として諸芸を学んだ。ことさら書筆・絵画には打ち込んだのであろう。四〇代後半までには書家としての名声を博しており、画家としても刊本の挿絵を描くほどの領域に達していた。また、知人の童女数人に手習い指南をしていた様子も窺われる。その折々に手本の執筆を求められることも多かったはずである。

このような京都での晩年生活、すなわち、貞享～元禄期に彼女の著作が集中的に出版されたのである。万治年間に窪田やす筆の手本（『女庭訓』『女初学文章』）が刊行されて以来、京都では女筆手本が続々刊行された。源女筆の天和二年（一六八二）刊『当流女用文章』、窪田つな（やすの娘）筆の貞享四年（一六八七）刊『女今川』、沢田吉筆の元禄四年（一六九一）刊『女筆手本』、長谷川貞（妙躰）筆の元禄七年（一六九四）刊『しのすゝき』などに加えて、前時代の書家である小野通の筆跡も元禄四年に『四季女文章』の書名で上梓されている。

従って、万治三年（一六六〇）刊『女初学文章』跋文の「都にはよろしき女筆あまたおはしますへけれは」や、天和二年刊『当流女用文章』跋文の「世上女筆殊更多」といった表現は誇張ではなかった。都では女流書家の活躍がめざましく、上京して自らの才能を磨きたいと願った女性は一人津奈ばかりではなかったであろう。

晴れて京都にやってきた二〇年前を、感慨深く回想しながら綴る津奈の序文には、書画を始めとする諸道への止むことのない探求心と、その一方で「隙行駒のあしなみ」、すなわち飛ぶように過ぎた月日を驚き惜しむ気持ちが溢れ出ているように思う。いずれにしても、津奈の個性的な往来物は、一つには京都における女筆の盛行という土壌の上に生まれたものであった。

ところでその序文中で気になるのは、ある知人の熱心な依頼により、津奈が女子学習用に書き与えたという「二札の文」である。それは知人により『女文章鑑』と名付けられ、やがて出版されることになった。ちなみに『元禄五年書目』「往来手本類」末尾の「女手本」項に「女書翰初学抄」と並んで二冊本の「女文章かゝみ」が見えるが、これを指すのであろう。従って、津奈は『女書翰初学抄』以前、すなわち元禄二年以前に別の女用文章を書いていた。そして、その出版は、序文の通り彼女の予期しないものだったであろうが、それは京都書肆による出版と考えるのが自然である。

『女文章鑑』が存在したのは紛れもない事実であるとしても、『国書総目録』『古典籍総合目録』や各機関の蔵書目録を丹念に調べても発見できず、近年まで『女文章鑑』を幻の書と考えていた。

ところが最近、母利司朗氏架蔵本中に貞享五年三月刊の『女文章鑑』二冊本があることを知り、氏のご好意により早速調査させて頂いたところ、『女文章鑑』は享保五年（一七二〇）刊『女中文章鑑』の先行書であることが分かった。『女文章鑑』は他に全く所蔵のない稀覯書であるうえに、母利氏蔵本は原装、原題簽付きで極めて状態が良

い。上巻に「女文章鑑」、下巻に「女文章かゝ見」の題簽を付し、下巻末に

貞享五戊辰年三月吉日

高辻通雁金町

中村孫兵衛梓

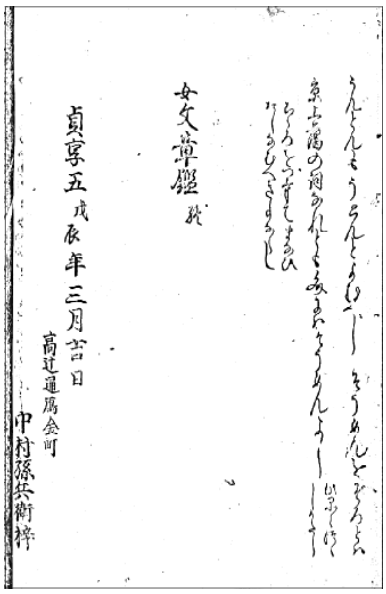
の刊記を有する。ちなみに享保五年板『女中文章鑑』の刊記は、

享保五庚子年三月吉日

高辻通雁金町

中村孫三良梓

となっており、年号・板元名の一部が改刻されている。また、序題・尾題も「女文章鑑」から「女中文章鑑」と改刻された点を除けば、両者は同一である（ただし『女中文章鑑』の外題は不明）。



女文章鑑（奥付）

この貞享板には居初津奈の署名は見当たらない。しかし次の点から、『女書翰初学抄』の序文にいう『女文章鑑』と同一であると断言できる。

まず、書名・冊数・刊行年代・刊行地域の点で全く矛盾がないこと。そして、両者には同様の記述が少なくなく、内容面で一層の共通性を見出し得ることである。

例えば、貞享板『女文章鑑』下巻末の書札礼には次のような記事が見える。

一、あらたまの春のめてたさ。あらたまとは「新玉」とかく也。あたらしき玉といふ心也。玉とは物をほめて付たる詞也。縦ば「玉のすだれ」「玉の鈿」「玉手箱」などゝいふもほめたる詞也。「玉のおのこ御子」と『源氏』にもかけり。あらたまのはるは、めでたきとしの始也とほめたる詞也。歌「あら玉の年たちかへるあしたよりまたるゝ物は鶯のこゑ」。…

これに対し『女書翰初学抄』上巻冒頭の頭書注には、

あらたまの春、「新玉」と書也。玉は万にほめてつける詞也。たとへば「玉すだれ」共、「玉のうてな」共いふがごとし。是をかへてかく時は、「あらたまりぬる春」とも。是、あたらしくとしのあらたまりたる心也。又は「立かへる春のめでたさ」共。是は去年の春のことしに立かへりたるやうに思ふ心也。歌に「あら玉の年立かへる朝より」ともよめり。又は「つきやらぬ春」とも、又「初春」共。…

とあり、両書が同一人作であることを物語る。

また、『女書翰初学抄』下巻末の「文かきやうの指南」第一条に

女文はいかにもやさしくあるべし。我、先の書にいひたるごとく、女性の文は詞をこゑにつかはず、読にてつかひ給ふべし。…

とあるが、貞享板『女文章鑑』下巻末には

女文章は、とかく音にてよむやうにはずいぶんかゝぬがよし。…

という記載があり、完全に一致する。つまり、『女書翰初学抄』に言う「先の書」とは、『女文章鑑』にほかならないのである。

これらの事実から、貞享五年板『女文章鑑』が居初津奈の著作であることはほとんど疑う余地がないであろう。以上の検討により、『女文章鑑』は『女百人一首』と並んで津奈の最初の著作と判明するのである。

次に、津奈のこれらの著作のうち、異彩を放つ『女文章鑑』『女書翰初学抄』『女文章都織』の三つの女用文章を検討しながら、それらの特色やそこから見えてくる津奈の人物像の一端を探ってみよう。

○『女文章鑑』

『女文章鑑』は二巻二冊で、上巻二一丁には序文及び消息例文二〇例、下巻二三丁には消息例文一二例と女性

書札礼を収録する。先の『女書翰初学抄』序文でも明らかなように、本書は女文の基本的な例文や作法を教えた初心者向けの女用文章である。

津奈が初心者に最も強調したかったことはいかなる点であったか。その答えを『女文章鑑』序文中に読みとることができる。

女文章鑑序

詞にあやまりと俗語とあり。あやまりはかたこと、俗語は下輩のいひふらすことなり。つねにかやうのさかひをわきまへたゞすへし。分て女性のことば・文章なとは、たとひ正言にても男のことばと、おんなのことばとのかはりあれは、おとことばをはふみにはかくへからず。今此文章は、おもてにさま〳〵のあやまり文章をかき、かたはらに注をくはへ、うらに正風躰をかきぬ。すゑの巻には女こと葉の消息にもちゆる事、ならびに四季の詞を考しるし侍りぬ。心をつけてまなひ給はゝ、是、女の童の文章に心ざしあらん、あさきよりふかきに至り給ふたよりともならんかし。

手紙は、誤った言葉や俗語、男言葉を使わずに、四季にふさわしい言葉で書くべきであるという。要するに、正しく女性らしい言葉遣いということに尽きるのである。そして、それを具体的に示すために彼女が採った方法は、各丁の表に「あやまり文章」を掲げて不適当な箇所を細字の注で指摘し、さらに同内容の正しい文章（正風躰）をその裏に掲げるというものであった。例文は全部で三二例で、それぞれについて正・誤の二通りを載せてある。例文の内容は相手の安否を問う手紙や訪問時の礼状、その他諸事についてで、主題が似通った例文も間々見受けられ、一般的な女用文章と比較して『女文章鑑』は例文の豊富さが感じられない。ここでは、多様な文面の学習よりも、正しく女性らしい表現の習得こそが重視されているのである。

例えば、上巻冒頭の例文を見てみよう。内容は知人の昨日の訪問に十分なおもてなしができなかったことを詫びつつ、またお越し下さいとの手紙である。まず不適切な文面として次の文章を載せる。

先度は御こしの所にふた〳〵と御帰にて、なに事も申さす、さて〳〵御残多存まいらせ候。近きうちにかならす〳〵御出まちまいらせ候。かしく

原本でもわずか五行の短文である（他の例文も同様）。この例文のうち、特に津奈が指摘する問題点は「先度」「ふた〳〵」「近きうち」の三カ所で、それぞれ次のような注書きを施す。

○「先度」、女性の文躰にかたし。「ひとひ」「いつそや」「せんもし」と書へし。

○「ふた〳〵」、あはたゝしき心也。これも「あからさまにて御帰」とかき侍らはやさしき也。

○「近きうち」、「とをからぬ比」又は「近き程に」なとかけは、やさしく聞ゆる也。

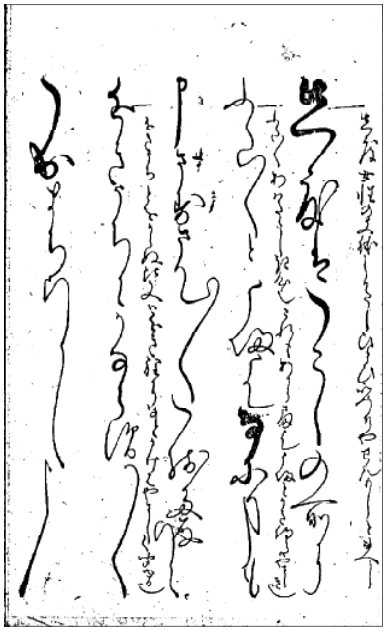
そして、次頁には適切な文章として、

日とひは、まれの御出に御さ候に、あからさまにて御帰、なにの風情も御座なく、いかばかり御のもしに思ひまいらせ候。遠からぬ比、のとやかに御あそひなされ候やうに御出待まいらせ候。かしく

手直しされた後者の文章は、文字詞も使われ、より女性らしい婉曲的な文面になっている。

もう一例紹介しておく。上巻第三通目で、昨日客として招かれた客からの礼状である。まず悪い例である。

昨日はめしよせられ、いろ〳〵御馳走、ことに一日あそひ候て御嬉しくそんしまいらせ候。まつ御礼のため、一筆申まいらせ候。かしく



女文章鑑（本文）

これに関する注記で、「一日」は「終日」でもよいと説明する。これは単に替

え言葉を例示したまでのことである。しかしその後の「まつ御礼のため」は全くの男文章であり、女文章では「まつ〜一御礼として一ふてとりむかひ」のようにすべきであると注意している。そして、次の模範文を提示するのである。

昨日はまいり、さま〜一御馳走なされ候。そのうへ、ひめもす遊ひ候て、心をのはしまいらせ候。かす〜一御うれしく存まいらせ候。先御礼に一筆とりむかひまいらせ候。かしく

他の例文も言葉遣いに関する種々の注記を伴っている。例文には見出し語がなく、また目次も用意されていないことからも、この『女文章鑑』は実用的な案文（いわゆる用文章）というよりも、初心者に女性らしい言葉遣いを習得させるためのテキストと言った方が的確である。

なお、下巻末尾一一丁は女性の書札礼や書簡用語に関する記事である。ここでも津奈は女性らしい言葉遣いについて繰り返し述べている。要旨を紹介しておく。

○女文章は「めづらしき字」を書いてはならない。仮名文字で書くのが優しくて良い。ただし仮名遣いにも作法があるのでそれを弁えておく必要がある。また、本来は誤りであるが女文に慣例となっている言葉遣いもある。例えば「いはひ（祝い）」は、「ゐはい（位牌）」と読み違えやすく相手に不快感を与えかねないので、わざと「いわゐ」と書くが、これは昔から御所方でも行われてきた慣習である。

○女文章にはとにかく字音を用いないようにする。「こんにち」「みやうにち」「せんどは」「せん月」「去年」「当年」「来春」「びんぎ（便宜＝音信）」といった言葉は堅い表現で聞き難い。「けふ」「あす」「あさて」「きのふ」「いつそや」「さきのつき」「こぞ」「ことし」「くる春」「あけのはる」「たより」などは柔らかい表現で良い。

○女文に「夕（ゆうべ）」は悪くないが「よべ」とするとより優しい。「かはる御事なく」も良いが「たがふ事」の方が優しい。「御きあひあしきよし」よりも「御きそくつねならぬよし」「れいならぬ」「すくれず御はしまし候よし」などの方が優しい。逆に「けさ程」を「けさがた」としたり、「がてん」をつめて「がつてん」とするのは賤しい言葉遣いである。「御物遠」は使わず「御うと〜一しく」「御とを〜一しく」と書くのが良い。このほか、総じて女文には「御」の字を付けると良い。

○『女書翰初学抄』

既に紹介した通り、本書は知人から請われるままに著した初心者用の女用文章である。執筆動機や対象者も『女文章鑑』と同様と思われるが、次の点で異なる。

①『女文章鑑』にくらべて『女書翰初学抄』は例文の多様性に配慮が見られ、各例文が目次によって一覧できるようになっている。また主題に合わせて散らし書き・並べ書き、また追伸文の有無などを適宜使い分けるなど、全体としてより実用的・実際的な書簡形式と内容を備えたものになった。

②『女書翰初学抄』の語注は全て頭書に掲げられ、個々の例文に即して詳細に施されている。例文と注釈文の対応関係は丸付き数字で明快に示され、注釈内容も年中行事故実や書簡用語・作法、名所旧跡、異名、古典、風俗・習慣、仏教など多方面に及ぶ。特に出典を明記するなど考証的姿勢は他の女用文章にはあまり見られない際立った特徴である。

③書簡用語や書簡作法についての記述が整理され、より見やすくなった。①や②とも関連するが、『女書翰初学抄』には編集上の注意がよく行き届いている。これは本書執筆時に出版の予定があったか、それを意図していたことを示唆するものである。なお津奈の作品には序文・跋文・刊記のいずれかに署名があるのが常だが、例外的に『女文章鑑』には署名がない。それはもともと出版を目的としていなかったためと考えられる。

なお、書名について言及すると、『女書翰初学抄』は言うまでもなく『書翰初学抄』に因んで津奈が付けたものであろう。『書翰初学抄』は、漢文の消息文（尺牘）と和様の消息文の二種類の文章を並べながら編んだ独特の用文章で、寛文九年（一六六九）に京都・谷岡七左衛門によって上梓され、大野木市兵衛板、井筒屋伝兵衛板、敦賀屋九兵衛板などの後印本を含め寛文九年板だけでも四種以上あり、その後、延宝七年板・天和四年板・享保一五

年板など数種の板種が生まれ、主に寛文～享保頃に流布した往来物である。従って、津奈の時代には教養ある男性諸氏に広く読まれ、盛んに用いられた用文章の一つであった。

津奈が『女書翰初学抄』の書名を付けた背景には、『書翰初学抄』の人気にあやかろうとする気持ちもあったかもしれない。あるいは、女筆手本の最古刊本の『女初学文章』（窪田やす筆）が寛永六年（一六二九）刊『初学文章抄』に因んだ書名であったことに倣ったものかもしれない。大津の窪田家は窪田宗保の娘・やすを筆頭に代々女性の能書を出した家柄であり、京都周辺ではよく聞こえた名門であったと思われる。津奈自身、『女文章都織』の頭書で「女中の御所持本」として窪田やす筆の『女庭訓』を掲げるから、やすは津奈にとって目標とすべき先達であったと思われる。

確かにこのような推測も可能であが、この書名は津奈の自信の現れと見た方が適切であろう。『女書翰初学抄』は初心者向けを唱っているにも関わらず、その施注は同時代のあらゆる女子用往来に卓越しているばかりか、男子一般の往来物にも引けをとらないほど詳細なものであり、津奈はそれなりの自負を持っていたはずである。その点に着目すれば、インテリ男性向けの『書翰初学抄』からあえて書名を採った点にこそ、彼女の自信の程、個性や自己主張といったものが窺えるのではないか。

さて、『女書翰初学抄』の例文は全て月次順に配列されており、上巻には一月から五月までの例文、すなわち「正月初て遣文之事」以下二一通を、中巻には五月から一〇月までの例文、すなわち「五月雨に遣文之事」以下二一通[17]、下巻は一一月から一二月までの例文、すなわち「雪のふりたる時遣文之事」以下一五通と付録記事六項をそれぞれ収録する。いずれも四季時候の手紙が主で、用件中心の例文や弔状なども含まれている。また、上巻のほとんどが散らし書きなのに対して、中・下巻の大半が並べ書きになっている。

例文のいくつかは他でも引用するので、ここでは特に注目すべき一例を紹介しておく。中巻第一状「五月雨に遣文之事」である。五月雨の季節の読書を主題とする例文で、文中にいくつかの女性教養書を掲げている。

> 晴まなき五月雨にて御座候。此徒然いかゞ御わたり候哉。爰元の事御すもじ給り候べく候。さやうに御ざ候へは、申兼候得ども、『源氏ものがたり』『狭衣』『伊勢物語』『栄花ものかたり』『枕双紙』、このうちいづれにても御かしたのみ入まいらせ候。かしく

その返状も同様で、『土佐日記』『無名抄』『撰集抄』『太子伝』『うつぼ物語』『竹取物語』『住吉物語』などを文中に列挙する。さらに、これらの古典について頭書で解説するように、単なる消息例文にとどまらず、女性の教養書の紹介という意味合いが強い。

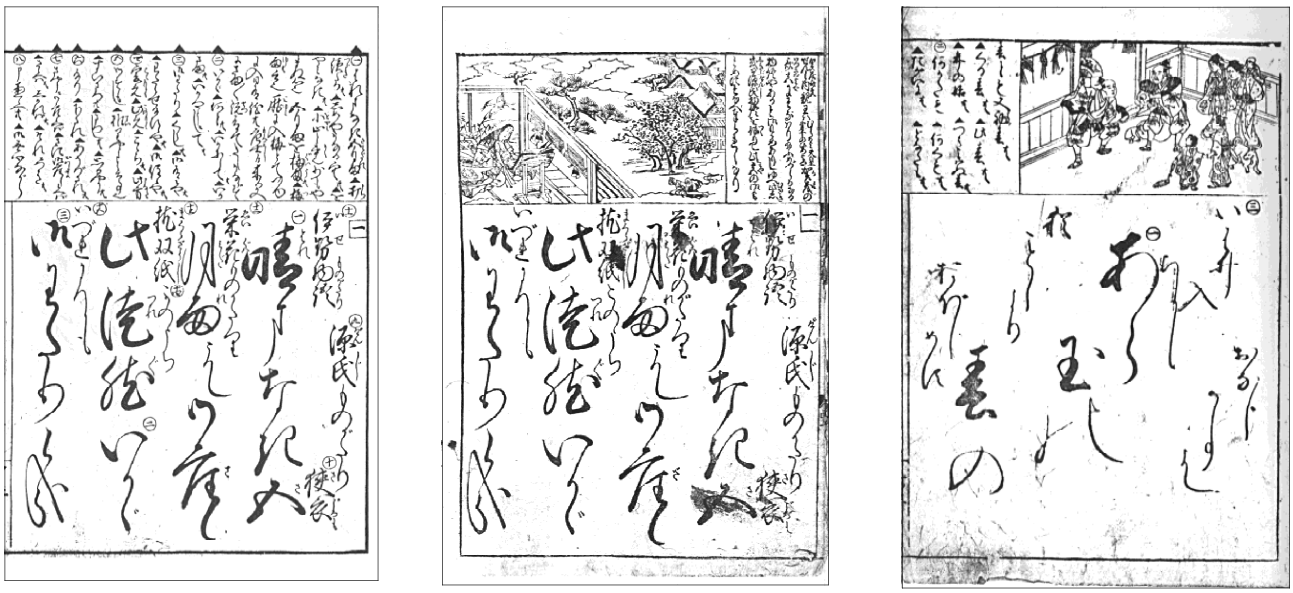
ところで、この例文で想起されるのが後掲の『女文章都織』である。これは古典の知識を満載した異色の女用文章で、『女書翰初学抄』に見える上記例文の趣向を全編に拡張したものと考えられる。

なお、『女書翰初学抄』が後世に与えた影響は重大で、この点でも女筆手本類随一の存在である。本文と付録記事の大半を丸写ししたものから、本文だけを模倣したものまでを含め、次の五種の改題本・改編本がある。

①元禄一〇年（一六九七）刊『女万用集』（大阪か・北国屋権兵衛ほか刊）＊三巻三冊からなる絵入りの女性教養書。第一巻は「子育やうの事」以下九項の教訓で、和漢の人物伝数例を引きながら子育て・孝行・貞心等を諭す。その一部は元禄二年（一六八九）刊『やしなひ草（婦人養草）』からの丸写しである。また、第二巻・三巻は全て『女書翰初学抄』のほとんど（中巻第二状一通と下巻末尾「文かきやうの指南」「目録折紙かきやうの事」の二項を除く）を模倣したもので、本書では全て並べ書きで比較的小字で書かれており、頭書のスペースが不足したため注釈を適宜割愛する。序文や作者名を削除した一種の海賊版。

②元禄一一年（一六九八）刊『女用文章大成（女用文章綱目）』（大阪・柏原屋清右衛門板）＊本文は下巻末の女弔状の一通を削除したほかは『女書翰初学抄』に全く同じ。頭書と前付を全て改めるが、下巻末の記事は『女書翰初学抄』からの抄録。津奈の自序を省き、作者名を抹消した海賊版。

③元禄一二年（一六九九）刊『当流女筆大全（増益女教文章）』（京都・和泉屋茂兵衛板。後印本に大阪・柏



左から女書翰初学抄・女用文章大成・女文林宝袋

原屋清右衛門板あり）＊本文は下巻末の弔状の一通を除く全例文を丸取りし、頭書を全て「女鏡秘伝書」に改めた改題本。下巻末の記事は『女書翰初学抄』からの抄録。津奈の自序を削除し、津奈原作を隠蔽した。

④享保六年（一七二一）刊『女文庫高蒔絵』（大阪・柏原屋清右衛門板）＊前記③の前付記事のみを差し替えた改題本。

⑤元文三年（一七三八）刊『女文林宝袋』（京都・銭屋庄兵衛板）＊『女書翰初学抄』の旧版下の一部を改刻して、付録記事を改めた改題本。津奈原作を記載する。頭書の一部を削除し、代わりに西川祐信の挿絵一五点をはめ込むとともに、各月冒頭の一二月異名の記事も全て割愛した。その結果、文字の配置のアンバランスな丁が生じたり、注釈の丸付き数字が飛んだりしている。さらに、例文中一通（もと下巻第一三状「いはた帯云々」の一状）が末尾へ移動したほか、下巻巻末記事の全てが削除された。

このように、約半世紀に五本の類書が登場した事実だけでも、『女書翰初学抄』の並々ならぬ影響が想像できよう。なお、本書下巻の女性書札礼も、各本へほぼそのまま踏襲された（詳細は第五章）。

○『女文章都織』

本書は津奈の遺稿を出版したもので、延享四年（一七四七）一一月に大阪書肆・安井弥兵衛によって板行された。その刊記には、

筆作　　居初氏津奈
補綴　　田中友水子
画工　　寺井重信図

とある。

また、本書の頭書には略注が掲げられているが、筆跡から本文と頭書は津奈の自筆で、前付記事が友水子および重信によるものと考えられる。刊行年代からいって津奈没後の出版であることは明らかだが、津奈の著作に付き物であった自署も見えず序文もないなど、生前中の出版物と若干体裁が異なるのも、遺稿を出版したためであろう。

それでは撰作年代はというと、頭書中に『女今川』二冊本の表記があるので貞享四年（一六八七）以降であることは疑いないが、元禄一三年（一七〇〇）刊の『女今川』の異本（沢田吉作）については全く触れていないので、本書は元禄一二年以前の可能性も高い。また、『女書翰初学抄』序文から想像される津奈の著作の執筆傾向や出版の経緯から、『女書翰初学抄』以後、すなわち元禄三年以後と考えたい。従って、これらの推論から『女文章都織』

の撰作年代を元禄三〜一二年（一六九〇〜九九）の一〇年間と仮定しておく。

いずれにしろ、本書は消息文や頭書に古典の知識を数多く盛り込んだ異色の女用文章である。手紙の例文集というよりも、『伊勢』『源氏』『枕草子』『万葉集』『百人一首』などの古典の教科書と言った方が妥当である。一例を掲げておく。第一章で掲げた新年状の返事（第二状）である。

春のはじめのめてたさの品々、仰の通に申おさめまいらせ候。『伊勢物語』題号（だいがう）の事は、在中将（ざいちうじやう）の自作（じさく）共、伊せへかりの使に行給し故なと、とり〳〵申候へ共、京極黄門（きやうごくくはうもん）のこゝろは伊勢と申女の筆作（ひつさく）に定らるゝ由、聞馴（きゝなれ）まいらせ候。業平（なりひら）の御事をつゝみて、それとはなしに書たるよし、まことに優（ゆう）なる詞づかひ、今の世には類（たくい）あらしと覚え候。殊に十三のとし、いとけなふしてと御座さふらへは、昔人と申なから、ためしまれなる御事共に候。猶、御けんにて。めてたくかしく

このように古典を主内容とした比較的長文の文面である。その頭書には、『伊勢物語』の題号、作者考（諸説および略伝）、同物語中に登場する女性名や皇帝名など、関連記事を盛り沢山に載せる。他の例文も全て古典の教養を主眼にしたもので、その概要を示せば次の通りである。なお、全二〇通のうち三通が並べ書きで、残りは全て散らし書きである。また例文の見出しや目次はない。

①女の持つべき本として『伊勢物語』を贈る新年状

②『伊勢物語』題号の由来を述べた新年状の礼状

③紫式部を偲ぶ石山詣の感想や『源氏物語』についての文

④参詣成就の祝儀とともに『源氏物語』執筆の経緯を述べた文

⑤深まりゆく秋に『狭衣物語』を読んだ感想と、訪問を請う文

⑥昨晩の訪問の御礼と『枕草子』を紹介する文

⑦婚礼祝儀に『栄花物語』を贈る文

⑧婚礼祝儀のお礼とともに『栄花物語』の概要について述べた文

⑨和歌初学者へ『万葉集』の作者などについて述べた文

⑩その返状として『万葉集』の概要にふれた文

⑪初めて会った人への挨拶とともに『百人一首』の作者について述べた文

⑫その返事に『徒然草』について懇談したいと訪問を請う文

⑬結納祝儀とともに婚礼道具の歌書・草子類吟味の依頼を承知する文（『古今集』や『大和物語』などの多くの書名を列記）

⑭その返状で適切な選定を願うとの文

⑮珍客の仲介に対する礼と『太平記』を紹介する文

⑯その返事に『保元物語』『平治物語』について述べた文

⑰日待ち[18]の際の礼と『平家物語』について述べた文

⑱その返事に訪問の礼とともに『源平盛衰記』を薦める文

⑲女舞見物の報告と『義経記』についての文

⑳その返事に『曽我物語』について述べた文

以上のように、日常やりとりする手紙の体裁を保ちつつ、全ての例文に古典の知識を採り入れてあるのが特徴である。中でも異色なのが『太平記』以下の軍書を扱っている点で、このような記事を伴った女子用往来は他に例がない。

さらに頭書の記事のいくつかを見てみよう。

◇文しやうのさうし（文正草子）

「是はさしたる証もなき作物語也。あまたのさうしの中にとり分めでたき事をかきたるさうしなるゆへ、女中の文はじ

めには是をよむと成べし。」

◇伊勢物語

「業平一代の事、うゐかうふり[19]よりはじめて終焉迄の事をあらはせる物語なり。」

「女のもつべきさうし

あながちに女に限り好色の道をしらしむべきにあらす。女は心やはらかに、すなをなるをもつて本とす。かるがゆへに、第一に歌道ををしゆる也。歌道をすける人はあらゝかに、よこしまなる事をかりにも思はぬ物也。故に此物語は余本に勝て歌道最一と定たる也。『詠歌の大概』にも『古今』『伊勢物語』『後撰』『拾遺』を学ふへきよしあり。しかれば、やすらかにすなをならんため、『古今』『後撰』『拾遺』をはまづさし置て此物語を女にをしゆるもの也。されば、二条家三代集の伝授にも、先此『伊勢物語』を始によむ事とあり。」

◇源氏物語

「紫式部、石山寺に籠て、作るへき草紙思案せしに、八月十五夜の月ことに明らかなりしに、左のつま戸のかうらんによりゐて傾く月をおしみしに、源氏の君須磨へさすらへ給ふ御さまのまのあたり心にうかひしかは、ふと物語に心つきて、則筆をとりて須磨明石の巻より書はしめけるとなん。…」

◇さ衣のさうし（狭衣物語）

「四巻あり。近比より『狭衣下紐』とて十六冊にせし也。さ衣の君一生の事を記せし作り物語也。」

◇清少納言枕草紙（枕草子）

「七冊あり。則、清少納言つくりしゆへ、作者の名共にかく云。『枕ざうし』とは、所々に枕言葉を書て諸事をかきつけたれはいふ歟。…」

◇栄花物語

「此物語は、人のめでたくさかへ、はんじやうをかきてはおとろへをしるし、生れ給ふ事をかきては又其かくれ給ふをしるしつる日記のあらまし也。ゆへにしうぎなどには古今さしてもちゐぬを、これは内の事はともあれかくもあれ、栄花といふ外題のめてたきにつきてつかはすとの事おもしろし。此めてたき題号のことく行末さかへ給へとの儀なり。」

以上のほか、次の書名（掲載順）が見える。

万葉集・世継物語（大鏡）・百人一首・新百人一首・武家百人一首・女百人一首・徒然草・古今六帖（古今和歌六帖）・新撰六帖・和歌七部抄・大和物語・八雲御抄・袖中抄・六家集・二八明題・大名よせ・小名寄・宇治拾遺物語・和歌題林愚抄・歌仙・女歌仙・同中古歌仙・新歌仙・中古歌仙・釈教歌仙・武林歌仙・太平記・保元物語・平治物語・平家物語・源平盛衰記・東鑑（吾妻鏡）・義経記・曽我物語

さらに「女中の御所持本」として、次の八点の女子用往来を紹介する。

女四書・女訓抄・かゞみ草・女かゞみ・女庭訓・女今川・列女伝・女諸礼

このように、御伽草子・物語（歌物語・歴史物語・軍記物語・説話物語・作り物語等）・随筆・歌集・類題和歌集・歌学書・史書・女訓書など、本書には実に八〇に及ぶ書名が登場するのである。津奈の教養の一端を知るとともに、津奈が女性の教養書をかなり広範囲に考え、独自の見解を持っていたことを示唆する。

以上に見た津奈の女用文章は、それぞれ三種三様であると同時に、いずれも他の女用文章には見られない独自性を持つものである。

まず『女文章鑑』は、女性らしい、正しい言葉遣いを徹底してマスターするためのテキストであった。その「正誤文例対照法」とも呼ぶべき方法は全く独創的であったが、本書はあくまでも初歩教材であって、日常の手紙の案文集として十分に利用できるものではなかった。目次もなければ見出しもなく、第一、例文の種類が少なすぎるからである。

しかし、「女性らしい言葉遣い」に執着した津奈の書札礼は、それまでの書札礼とは趣を異にするものだった。逆

に津奈以降の女性書札礼においては、手紙における女性らしさが強調されるようになった感がある。近世の女性書札礼は、時代とともに作法が広範かつ細部に行き渡ると同時に言葉遣いに関する記述が多くなっているが、その最初のものが『女文章鑑』であった。

さらに二年後の『女書翰初学抄』は、例文の内容もずっと豊富になり、書止語「かしく」や散らし書き・並べ書きを適宜使い分けるなど実用書簡の例文集として十分な内容を備えただけではなく、江戸時代の女子用往来中最も詳細な注を用意してあった。頭書の替え言葉で例文の文言を随時変えられ、一層バラエティに富んだ表現も可能となった。また、下巻末の用語集や書簡作法集などと並行して使用するうちに、語彙そのものや関連知識の理解も進み、的確な手紙文を習得できたであろう。本書以後に生まれた種々の改題本の影響も含めれば、『女書翰初学抄』ほど多くの女性に読まれた女用文章はないといっても過言ではない。

それでは、『女書翰初学抄』が多くの類書を生んだのはなぜか。

いくつか理由が考えられるが、一つは実際に手紙を書いていて役立つ情報が多いという実用性であろう。言うまでもなく巻末や頭書の付録記事である。また、頭書注釈には注番号を付記して問題の箇所が即座に分かるようになっていた。

もう一つは女性自身の著作であったこと。本書の女性書札礼は「文の法式さま〳〵ある事ながら、女性はさのみこまかなる法をたゞし給はずとも越度（おちど）にはなるまじ」という方針に貫かれ、必要最小限の知識に絞られていた。その反面、女性らしい言葉遣いには最大限の注意が払われていた。男性側からの女性書札礼は多く「男性」作法の簡略版のごときもので、「女性」らしさへの着目は乏しくなりがちであった。中世以来の書札礼の伝統がそれを物語っているし、津奈の言う「こまかなる法」の方向に一層進んで行った江戸中期以降の女性書札礼はほとんど男性によるものであった。

さらに第三に、性差を重視する一方で身分差を強調しなかったこと。津奈は、特定階級の女性というよりもあらゆる女性を意識して書いている。つまり『女書翰初学抄』は全ての女性のための女文の基本であり、汎用性に富んだ女用文章であった（これ以後、女用文章の一般傾向となるが）。従来の書簡作法の関心事はもっぱら尊卑・上中下別の作法であった。江戸前期を代表する代表的女性書札礼を含む『をむなかゝ見』や『女式目』では、上輩・同輩・下輩のそれぞれに上下の差を付けた六段階または五段階の例文を具体的に掲げて、書簡用語や言葉遣いの違い、差出人名・宛名・脇付等の語句の高さ、また、「御」の字のくずし加減までを考慮した記述が見られた。これらに比べると、津奈は尊卑の差をことさら強調することはなかった。あるいは、初心者用としてあえて取り上げなかったのかもしれない。少なくとも確かなことは、津奈が尊卑の別よりも男女の別に最大の注意を払っていたということである。

百候往来

他方、消息文中に古典知識を盛り込むという『女文章都織』の趣向は、既に『女書翰初学抄』中にその萌芽が見られた。消息文中に諸知識を含ませて、その両者を同時に学習させるという文章スタイルは、まさに往来物の常套手段であった。『庭訓往来』を始め多くの往来物が消息文中に各種の単語集団を挟むという形で、諸知識の並行学習を達成できるように目論まれた。やがて単語ばかりでなく、それに関連する諸知識や教訓なども含むようになった。

一例をあげれば、寛文九年（一六六九）刊『江戸往来』は新年状風の「陽春之慶賀珍重々々」という書き出しで始まり、江戸の地誌に関する諸知識を列記した後で「免伝多久穴賢（めでたくあなかしこ）」と書き止めるように、全編が一通の手紙文スタイルで書かれている。また、「消息往来」型の先駆と考えられる貞享頃（一六八四〜八八）刊『百候往来』は全二六通の書状を収録するが、例えば上巻第一状は

一筆致（いたし）二令啓上（せしめけいじやう）、啓達（けいだつ）、啓入（けいにう）二候。新春（しんしゆん）、年甫（ねんぽ）、改暦（かいれき）、年始（ねんし）之御慶賀（けいか）、

御吉慶（きつしん）、御嘉例（かれい）、御佳事（かじ）、重畳（ちやうでう）、目出度（めでたく）、珍重（ちんちやう）、不レ可レ有（べからずある）二尽期（じんご）、際限（さいげん）、休期（きうご）二候。…

のように、消息に多用する類語を次々列挙し、書止に「恐々謹言」または「謹言」を置くものであった。

つまり、両者の例から明らかなように、冒頭と文末・書止等は一応書簡形式にしてあるが、文面のほとんどが語彙や知識、教訓の羅列であって、実際に用いる消息文ではない。これは往来物に特有の文体で、「往来文」とも呼ぶべきものである。従って、この「往来文」スタイルは津奈の独創ではありえないが、「往来文」を用いてもっぱら古典の知識を紹介した点がユニークであった。

このように見てくると、津奈の三つの女用文章はそれぞれ、他の女用文章には見られない顕著な独自性を持つものであったことが知れよう。

女性の視点から編まれた津奈の往来物は、独創性と個性に満ちており、書札礼のみならず女性の心得や教養の面で近世女性の大きな指針となったと思われる。第五章で紹介するように、女性書札礼の点からも、津奈は一般女性のために手紙の基本事項を簡潔に説いた先駆者であり、書札礼の庶民化に多大な貢献をしている。

このように、近世庶民文化における居初津奈の存在は頗る大きいのであり、彼女を往来物史上特筆すべき女性として、また、近世最初の女性啓蒙家として注目されよう。

三、芸術性を追求した長谷川妙躰（人物と作品）

先に紹介した『女用文章糸車』の記事は、妙躰の事跡を知るほぼ唯一の記述として注目すべきものであるが、その要旨をもう一度確認しておこう。

妙躰は幼時より御所奉公したが、その間一二年間にわたり妙喜尼という女性に手跡を学び、その後、京都の町内で女子を集めて手習いを指南した。そしてこの頃に、妙喜尼の書風から一変して独自の書流を起こしたのであった。世間ではこれを「妙貞流」と呼び、彼女は類稀な名声を得て、近代一流の能書となった。

さて、文化一五年（一八一八）刊『本朝古今新増書画便覧』[20]には、

妙貞尼（メウテイニ）。長谷川氏。京師ノ人。書法一家ヲ成ス。世ニ妙貞流ト称ス。

と記して、妙躰流の流行が事実であったことを裏付ける。妙躰の生没年や経歴についてはほとんど分かっていないが、江戸中期に一時代を風靡したことは、今日伝わる妙躰の女筆手本の圧倒的な数からも十分に想像される。

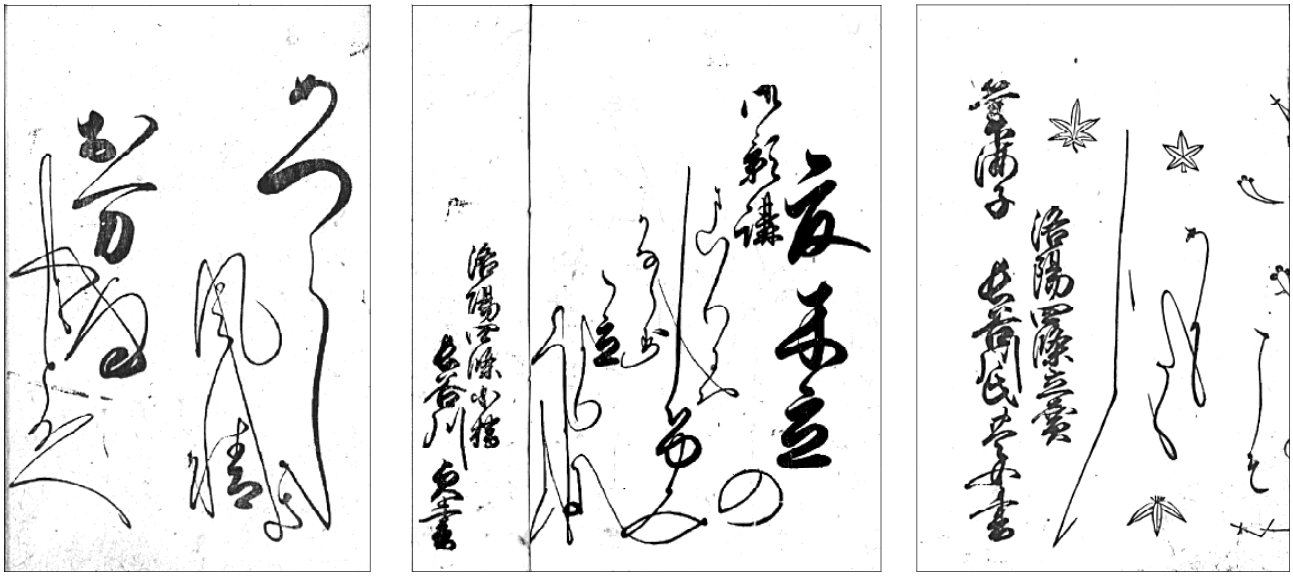
妙躰の最古の手本は、元禄七年（一六九四）刊『しのすゝき』と思われる。同書の筆跡は妙躰と酷似するものの原本には彼女の署名はない。従って、周辺資料によらざるを得ないが、食い違いが激しいのである。すなわち『女学範』では長谷川妙躰と長谷川貞を別人扱いにして『しのすゝき』を貞の作品とし、『享保一四年書目』は妙躰と貞を区別して、これを妙躰の作品とする。また、『大坂本屋仲間記録』は本書を妙躰筆とする[21]。一方、家蔵の『女筆春日野』には「洛陽四条小橋／長谷川貞書」の署名があり、『享保一四年書目』は正しく貞筆と記すのに対して、『江戸出版書目』には長谷川妙貞筆と記す[22]といった具合である。従って、これらを総合して考えれば、妙躰（妙貞）も貞も同一人と見るべきであろう（巻末補注〔3 頁〕参照）。

ところで、享保一五年（一七三〇）刊『女中庸瑪瑙箱』、また同じ刊記を持つ『女筆春日野』の巻末広告「女教訓女用物板行目録」中に、

女筆しのすゝき　　長谷川氏　全一冊
女筆雲井（くもゐ）の鶴（つる）　　長谷川氏　全三冊[23]
女筆春日野（かすかの）　　同氏筆　　全三冊

と記載されているが、この三本は妙躰の比較的初期の作品と考えられる。この当時は、妙躰は「貞」と名乗っていたようだが、著作に記された署名や住所から、これらは『わかみどり』よりも先、すなわち宝永四年（一七〇七）以前に刊行された可能性が高い。いずれにしても、上記三作品は署名が無記載か、署名があっても「長谷川貞」以外の例はないようである。

その後、宝永四年刊『わかみどり』の上・中巻[24]末尾に、



左から、しのすすき・女筆春日野・わかみどり

洛陽四条立売

筆海子　長谷川氏豊女（書）

と署名しており、出家以前に「豊」と名乗り、「筆海子」と号したことが分かるが、この「豊」の署名は妙躰の他の作品には全く見られないものである。

一方、出家後の法名である「妙躰（妙貞）」の記載は、正徳三年（一七一三）刊『さゝれ石』の刊記に、

洛陽四条立売

筆海子　長谷川氏妙躰書

とあるのが初見だから、宝永四年から正徳三年の六年間に落飾したのであろう。事実、『さゝれ石』上巻見返には、妙躰と思われる尼僧姿の女性が描かれている（写真参照）。出家時の年代を仮に四〇歳頃と仮定すると、妙躰は寛文末年～延宝初年頃の生まれとなる。

さゝれ石（尼僧は妙躰か）

すなわち、若くして御所奉公をした豊は、少女時代に妙喜尼のもとで長期にわたる手跡修行をし、やがて独立して手習い指南を業としたが、この頃から独自の書風を起こしたと伝えるから、それは『しのすゝき』を出版した元禄頃のことであろう。

前田訣子氏の言葉を借りれば、妙躰の「肥瘦の変化に富み、ふくよかなやわらかみとねばりをのこしながら、大胆に、のびのびと筆が運ばれ[25]」た筆跡は、それまでには全く見られなかった独特のものであり、たちまち京の女性たちに評判になったようである。宝永元年（一七〇四）刊『みちしば』跋文中にも、

かつは世にもて習ふ『しのすゝき』、みたれて所々のたからとなれは、はちめかしく、もとより女筆（によひつ）の品およはすといへと…

みちしば（口絵）

とあり、『しのすゝき』が刊行後間もなく京中の人々の定評を得た事実を彷彿とさせる。さらに、宝永末年頃には妙躰は尼となり、女筆指南のかたわら次々と手本を書いた。妙躰の手本のほとんどが落飾後であるのも、日々女筆指南をするだけの自由な身分になったためであろう。そんな折に、京都での妙躰の評判に注目していた京都書肆・表紙屋彦兵衛らの求めにより、妙躰はまず『わかみどり』を執筆、以後名声はますます高まり、複数の板元から種々の手本を出版することとなった。享保期には妙躰流手本の海賊版も出回ったとみえ、この頃から柏原屋板の妙躰手本には、

世に長谷川氏女筆と名付あらはせるもの数多ありといへとも、筆海子の号なきものは真筆にあらさる者也。

洛陽

筆海子　長谷川妙躰書㊞[26]

という断り書きを入れる程となった。先の『わかみどり』にはこの跋文は見えず、『さゝれ石』の跋文も

此書は去方の所望によつて、若は童蒙の為にさゝれ石のいはほともならさらめやと筆を染る者也。

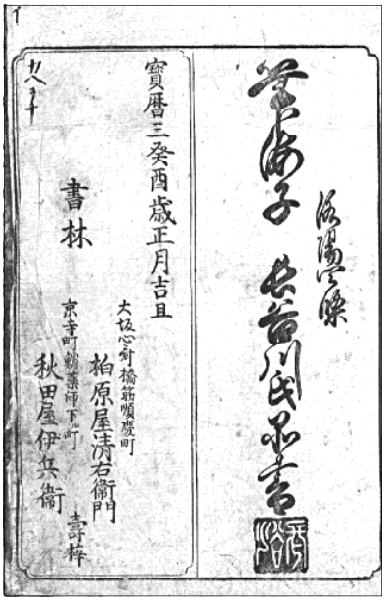
洛陽四条立売

筆海子　　長谷川妙躰書

というもので、「筆海子の号なきものは…」の文句は出てこない（ただし後印本には付す）。それに続く正徳四年（一七一四）刊『難波津』も同様であり、この跋文が見えるのは享保（一七一六～三六）以後と見られる。

この時期は女筆手本出版のピークで、平均すれば毎年のように新しい手本が出版され、近世を通じて最も盛況だったが、この頃に妙躰手本の類似品が出回ったのであろう。ただし、現存本からはその様子をとらえることは困難で、

宝暦一二年（一七六二）刊『女筆初瀬川』が妙躰風を装った唯一の例である。ただし、その筆跡は妙躰とは全く別物であるから、例の断り書きは妙躰筆に偽装した類似品の排斥というよりも、他店出版の妙躰手本を排除する目的で、商魂逞しい柏原屋が仕掛けた宣伝だったとも見られる。事の真偽は別としても、妙躰が著名になればなるほど、これらの類似品をめぐって書肆間の競争が激化したのは当然で、要するに妙躰の人気の高さを示すものにほかならなかった。



その後、妙躰の門下にも女筆手本類を著した女性が出た。その一人は、寛延二年（一七四九）刊『女教文海智恵嚢』の筆者・長谷川貞寿である。同書の板元跋文には、

> 長谷川妙貞尼の書残されし女文の数々なる杜の落葉の数つもり、百に余り千に充てあまねく世に流布せるもの、幾そばくにかあらん。其流を汲て文の道に堪たる人多き中に、長谷川貞寿尼は正しく妙躰尼の骨法を伝へてきはめたる能書のほまれ世に高し。常々、女子に教へられし文どものありしを、せちに乞求め侍りて、『女文海智恵袋』と題し、桜木に寿き侍りて、朽やらぬ名誉を万代に伝ふといふ。
>
> 浪華書舗　白雲館識

とあって、妙躰門下の多きことを想起させるが、外題角書に「筆海子長谷川筆」と記し、刊記にも「筆海子　長谷川貞寿草書」と記載するところを見ると、貞寿は妙躰から「筆海子」の書号を贈られたのであろう。

ところが、筆海子の号を贈られた女性はほかにも存在したのである。宝暦三年（一七五三）刊『女要文通筆海子』の序文には、

> 筆海子の号むべなるかな。長谷川の流れ絶ず、筆の海浪静にして、浜の真砂の数々世に伝りしもしほ草、手習ふ女の至宝となりぬ。近曽筆海子のひめ置れし草稿の中に一巻の文を得たり。…乙女子の教誡艸ともなさばやと、桜木に彫りて世に弘むるものならし。
>
> 宝暦三癸酉春
>
> 洛陽　梅月堂敬書

女要文通筆海子（奥付と本文冒頭）

とあり、いかにも妙躰の草稿を発見して上梓したかのような書きぶりである。しかし、跋文には、

> 筆海子は先師・妙貞尼の書号にして、あまねく世人の知れる処也。それかし、長谷川のなかれをくみ、水上をけかすのそしりをまぬかれすといへ共、今、幸に筆海子の号をうけつき侍りぬ。よつて、此書の題号にそへ侍るのみ。
>
> 洛陽四条
>
> 筆海子　長谷川氏品書㊞

と書かれているから、ここでいう「筆海子」は品の書号である。つまり、貞寿と品の二人に「筆海子」の号が譲られたことになる。

こうして、妙躰門下にも一人二人と女能書が出たのであった。妙躰の作品は、宝暦三年刊『長谷川筆の錦』と同四年刊『女教倭文庫[27]』を最後に姿を消すから、この頃が妙躰の最晩年であり、八〇歳前後に達していたものと思われる。

しかし、貞寿の作品は『女教文海智恵嚢』とその改題本『女文硯四季文章』（明和五年刊）の二本のみ、品の作品も『女要文通筆海子』『女筆みよし野』（宝暦三年刊）の二本のみで、以後作品が途絶えているから、貞寿や品が妙躰流を再興することはなかったようである。妙躰が健在のうちは二人とも相応に門弟を集め、妙躰流の普及に努め

たであろうが、妙躰亡き後は全く振るわなくなったのであろう。ほかにも、長谷川氏を名乗る女流書家は多く、長谷川縫、長谷川富、長谷川佐世らが作品を遺している。いずれも妙躰門下と考えられるが、彼女たちも妙躰流を復活させることはなかった。

ただ、寛政二年（一七九〇）刊『媛山四季かな文』広告中にも「長谷川女用文章」なる手本が見えるから、その後も妙躰流はごく少数の女性によって学ばれたと考えられる。かつての妙躰流の栄光は京の人々には記憶に残っており、それを追慕する者もあったであろう。しかし、宝暦後半からは女筆手本の新刊は激減しており、女筆手本が時代に取り残されていったのは明らかである。言わば、妙躰によって生まれた女筆ブームは妙躰の死によって終焉を迎えたのである。当時の書流は、往々にして二代と続かず初代限りで消滅していったが、妙躰流も例外ではなかったのである。

ここで、妙躰の作品を一覧にしておこう。

元禄七年（一六九四）刊『しのすゝき』

宝永四年（一七〇七）刊『わかみどり』

宝永六年（一七〇九）刊『雲ゐの鶴』

正徳三年（一七一三）刊『女堪忍記大倭文[28]』『さゞれ石』

正徳四年（一七一四）刊『難波津』

享保一〇年（一七二五）刊『錦乃海』

享保一四年（一七二九）以前刊『女筆春日野』『女筆君が代』『女筆藻塩草』

享保一八年（一七三三）刊『蝉小川』『近江八景』『ちよみ草』

享保一九年（一七三四）刊『女筆指南集』

享保二〇年（一七三五）刊『見寿乃雪』『女筆続指南集』『女筆続後指南集』『女筆岩根の松』

享保頃刊『女筆百千鳥』

宝暦三年（一七五三）刊『長谷川筆の錦』『女筆みよし野』

宝暦四年（一七五四）刊『女教倭文庫』

以上のように、彼女の手本はほぼ六〇年間にわたって出版され続けたのである。それぞれの概要は巻末「女筆解題」に紹介した通りである。

これら妙躰の手本は、筆跡の独自性に比べて内容面での特色はあまり見られない。また、作品数が多い割に、彼女の人物像を探るための手掛かりは極めて乏しい。ただし、『難波津』や『錦乃海』には参考にすべき若干の記事が見られる。『難波津』中の書札礼は次章で触れることとし、ここでは『錦乃海』から彼女の筆道理念の一端を窺ってみよう。

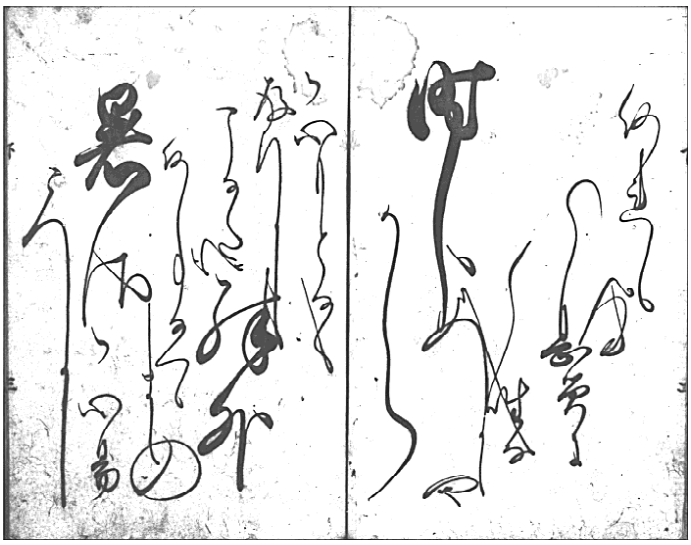
『錦乃海』の各巻の表紙見返には「手習の仕用の事」と題した記事が見える。

筆の道は男も女も替る事なきながら、女子はたゞさら〳〵とやはらかに書を専とするなり。惣じて手先の芸は、手の内のれんま、心のあんばいにて見事を顕はす事に候へば、只草紙となく白紙となく、毎日おこたらず数へん習ふにしくはなく候。一へんにても多く手ならひいたし候程、紙あたり、筆ひやうし、心と手先とに自然とそなはり候。しかし、女子はやはらか成がよしとのみ心へて、くる〳〵、ぬら〳〵とばかり書ては手はあがりかたく候。むかしより女の能書あまたさふらふに、何れも筆の道に叶はざるはなく候。筆の道と申すは、たとへば人の身にもほそき所、太き所、丸き所、平め成所有て、姿よくつり合候なり。面ていも高ひくなく瓜のごとく、手足もふとほそなく棒のごとくならば、生はたらく形にては有まじく候。其ごとく文字も点画のはり合有て、しかもふとき所にもたるゝ気味なく、細き所にぬかりたるよはみなきを生字と申候。

手跡ふしくれだつものにて、ひとへに筆を数へんはこひ、点画はこゝろにわすれずならふがかんようにて候。たとへば、てんくはくは材木のごとく、筆をはこぶは番匠のごとくにて、いづれがかけても家にはなりがたしとく

ふうあるべく候。爰（ここ）に去（さる）人の手跡をすこしうつし、筆の道（みち）をことはり候。千万の字にても、此心にてよく〜〜さとりたまふべし。…

この文章で妙躰が述べている女筆の大意は、まず筆道の根本が男女で変わるものではなく、日々の習練によって手跡の技と心の両面を磨くことが大切なこと、そして、女性には女性らしい書き方があるが、常に柔和一辺倒の筆致ではならず、緩急自在で変化に富みながら、なおかつ全体の調和がとれた「生字（いきじ）」でなくてはならないこと、手跡稽古の積み重ねによって、手跡の根本たる「運筆」や「点画」、また「紙当たり」や「筆拍子」といったものが自然と身に付くことなどである。



錦乃海

「生字」とは「生き働く字」、つまり「生命を宿したような躍動感のある字」といった意味に理解できるが、妙躰のあの独特な筆遣いは、ここでいう「生字」を体現したものにほかならなかった。

後述するように、居初津奈が文字の「点（てん）、引（ひき）、捨（すて）、はねなどの所をながく書（かく）まじき也」（『女書翰初学抄』）と述べたのは、恐らく、元禄頃からはやり始めた妙躰流に対する批判であったと思われる。津奈が理想とした女文の基本を一言に凝縮するならば、それは「やさしさ」であった。具体的には、文面におけるやさしさとともに、字配りにおけるやさしさである。妙躰の場合は、女性らしさを「やわらか」という言葉で表現しているが、「やわらかさ」を基調としながらも、文字に込められた生命、点画や字配りにおける変化と調和を第一義としている点は重要である。妙躰は、少女時代に妙喜尼から学んだ書流をやがて破っていった。そうして辿り着いた一つの境地、彼女が自ら体得したその筆法の真髄を「生字」と呼んだのであろう。

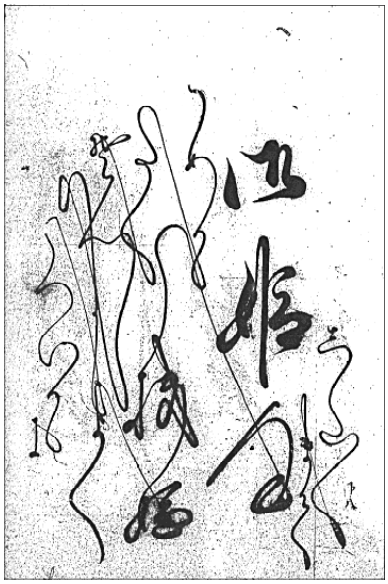
ともあれ、『錦乃海』のわずかな記事だけでは結論付けることはできないが、妙躰には芸術家として書を追求する姿勢が強く感じられる。そしてそれはある意味で男女を超越したものであったと理解されるのである。津奈が身分を超越した女性らしさを強調したのに対し、妙躰が目指したものはいわば男女を越えた書の芸術性であった。

津奈と妙躰の生きた時代にはほぼ三〇年の開きがあり、書家として活躍した時期は津奈が貞享〜元禄期、妙躰が元禄期〜宝暦初年であった。従って元禄期には、ほぼ五〇代に達した津奈と、まだ二〇代後半と思われる妙躰が、それぞれ独自の女筆手本を執筆したわけである。そして、いくつかの点で好対象をなすこの二人の女性の違いは、個性の相違だけでなく、時代の変化や世代の違いによる部分も大きかったと考えられる。

享保期をピークとする約半世紀間は女筆手本類の黄金時代であり、この時代には女流書家が輩出したが、断片的な情報をつなぎ合わせながら、数人の女能書について知り得る限りを述べてみた。

しかし、単に女流書家や女筆手本が多く誕生したこと以上に重要なのは、女筆の盛況が庶民に潜在していた逸材を掘り起こし、一天才少女の名を世に広めたことではなかろうか。

その女性こそ春名須磨であり、彼女は享保九年（一七二四）刊『女筆いろみどり』と享保二〇年（一七三五）刊『女用文章唐錦』の二つを書いた。前者は三巻三冊で、その中巻巻末に「春名氏須磨十一歳書之」とあることからすると、



女筆いろみどり

後者は須磨が二二歳頃の書と考えられる。とにかく、わずか一一歳で見事な手本を書いたことは当時としてもセンセーショナルな出来事だったらしく、『享保一四年書目』にも「須磨一一歳」と特筆[29]される程の異例であった。そして驚くべきことに、彼女は播州佐用郡新宿村の百姓小三郎の娘であったという[30]。のち、大坂へ嫁いだのであろうか、『女用文章唐錦』では彼女の住所が「大坂木挽北之町」となっている。

この須磨の手本の存在は、単に書に秀でた女性が存在したというにとどまらず、近世女性文化の多様性と奥行の広さを痛感させる事例であり、そのセンセーションがもたらした効果のいかほどであったかと興味を抱かずにはいられない。

なお、『近世人名録集成』中の諸文献に掲載された少年・少女の能書は決して少なくない。例えば、嘉永二年（一八四九）刊『江戸文人寿命附[31]』には幼い子どもの似顔絵とともに次のような記事が見える。

中村鶴鳴　五歳

父母のしこみのほどぞかしこけれ　うなゐ童（わらは）の筆の見事さ

これは五歳の少年能書だが、次のような若年の女流書家も記されている（＊以下は『近世人名録集成』所載頁）。

大島加根女（小紅。当七歳。雪城門。江戸）＊二巻一七五頁。

蘭香（田代孝女。名、馨子。今茲一三歳。越後）＊二巻四四五頁。

華山（藤田荻女。今茲十二。越後）＊二巻四五二頁。

これらは市井に見られた書家のごく一部に過ぎないのであって、五歳、七歳といった天才書家はほかにも存在したであろう。

いずれにしても、これら俊才の少年・少女を世に知らしめるには出版物が重要な働きを担ったのであり、巷間に埋もれていた書家たちを掘り起こしたのは書肆の功績と言わねばなるまい。先述の『女書翰初学抄』の序文からも察せられるように、書肆は出版すべき能書の筆跡を求めてやまなかったのである。

（1）『日本随筆大成』第二期一四（昭和四九年　吉川弘文館）一五七頁。

（2）『国書人名辞典』第一巻（平成五年　岩波書店）によれば、漢学者で、享保一四年（一七二九）五月生、寛政六年（一七九四）二月二五日没、六六歳。名、資衡。字、穉圭。通称、久川靱負。号、玄圃・時習堂。京都の人で、初め石田梅岩に師事し、のち龍草廬に詩と書法を、岡崎駒に古文を、更に長崎の劉図南に華音を、京都の安子貫に琴を学ぶ。書法はのち宮崎筠圃に学び、一家を成した。このほか森銑三・中島理壽『近世人名録集成』（昭和五一〜五三年　勉誠社）第一巻四・一三・二四頁、同第四巻七八頁にも若干の記事を載せる。

（3）『小野阿通』（大正六年　「大仏頂面六甲野老」著　＊著者の本名は不明）一八頁には、小野通が井上通と混同されやすいことに触れ、『女学範』もこの誤りを犯して井上通の『処女賦』『和歌往事集』を小野通の作としたことを指摘する。

（4）『女学範』では長谷川妙躰と長谷川貞を別人のように記載するが、この二人は同一人であると考えられる。

（5）天和二年刊『当流女用文章』の筆者・源女と同一人か。

（6）競花の名は『女筆芦間鶴』原本により補う。

（7）『近世人名録集成』第一巻五頁に、「渤海保。字、士亨。号、北門。大宮今出川下ル町。渤海春吾」とある。親子ともに著名な京都の書家であった。

（8）龍輝は大江の師である龍草廬の娘であるが、前項「龍貴」も龍草廬や龍輝と血縁関係にあったものと想像される。

（9）平信好については、『近世人名録集成』第一巻五頁に「平信好。字、師古。号、廬門。黒門綾小路下ル町。岡崎平太」とある（同一三頁にも同じ記載がある）。また、同第四巻七九頁に「草廬門。岡崎廬門。名、信好。字、師古（シコ）。小字、平太。廬門（ロ）、又、彭斎（ホウ）ト号ス。京師人。詩ヲ善クス。天明七年三月ニ没ス。年五十四」とある。従って、平信好は大江資衡と同門であり、彼の母もまた江戸中期の京都の女流書家として知られていたのであろう。

（10）『女学範』には単に「縫女書」とあるが、『江戸出版書目』七〇頁には「長谷川氏」と記す。

（11）小野通の出自や生涯については諸説あり、今のところ確証のある定説はない。そのため、『日本架空伝承人名事典』（平凡社）や『日本伝奇伝説大事典』（角川書店）などにも一項目をなすが、今、『日本歴史人物事典』（朝日新聞社）によってその一端を示せば、「阿通」「於通」とも書き、浄瑠璃作者の祖とされる伝説的な人物である。浄瑠璃の嚆矢「浄瑠璃御前物語」（「十二段草子」とも。一四七五年以前に成立）の作者に擬せられる。織田信長の侍女説に始まり、豊臣秀吉や淀君の侍女説、あるいは東福門院の侍女説など諸説あるが、浄瑠璃の起源や成立年代から考えていずれも疑わしい。その中で、美濃の武士・小野正秀の娘お通（一五六八〜一六三一）が有力視されてきたのは、彼女が和歌に秀で、画や琴にも長じ、ことに能書家としての名声があったのを浄瑠璃作者に結びつけた結果という。いずれにしても伝説の域を出ない女性である。なお、お通は「おつう」ではなく「おづう」と濁るのが正しい。

（12）この記事に見える女流書家は、光明皇后・小野通・佐々木照元の三人である。本書の記事からしても、柳亭種彦の言う「寛永以後の女三能書」の認識は江戸中期には一般的でなかったことが想像されよう。なお『女五常訓』の享保一四年初板本（東京家政学院大学蔵）は未見のため、ここではそれに次いで古い元文三年板（家蔵）によった。

（13）『国書人名辞典』第二巻によれば、生没年未詳、元禄〜享保（一六八八〜一七三六）頃の書家で京都人、名を照、字を由也といい、照元は通称である。佐々木志頭磨（一六一九〜一六九五）の娘で、粟津信濃介の妻となった。父に学んで書をよくし、弟・佐々木晦山と共に父の書法を伝える。夫の没後、書を教授した。

（14）本書で取り上げた日本の女流書家は、光明皇后・佐々木照元・長谷川妙躰（記事は後掲）の三人である。これも柳亭種彦の指摘と異なる。

（15）この辺の事情については『江戸期おんな考』第七号（平成八年　桂文庫）の拙稿「近世刊行の女筆手本について」を参照。

（16）後に「女実語教」と「女童子教」の本文が一本化されて「女実語教」のみの書名となったものが多い。

（17）第一六状「紅葉を送る文之事」の返状は頭書欄に掲載されているため、これを含めれば二二通である。

（18）前夜から潔斎して寝ずに日の出を待って拝むこと。一般に正・五・九月の吉日を選んで行い、終夜酒宴を催す。（広辞苑）

（19）初冠（ういこうぶり）。成年に達した男子が元服して初めて冠をつけること。ういかがふり。ういかぶり。ういかむり。（広辞苑）

（20）前掲『近世人名録集成』第四巻三五八頁。

（21）大阪府立中之島図書館編『大坂本屋仲間記録』第一一巻（昭和六一年）二七六頁。

（22）樋口秀雄ほか編著『江戸出版書目』（昭和三七年　未刊国文資料刊行会）一四頁。

（23）かつて某古書店目録に写真掲載されたことがあった。やはり妙躰流の女筆手本で、題簽に『雲ゐの鶴』と記された三冊本であり、宝永六年伏見屋板と紹介されていた。この刊記は『しのすゝき』宝永六年後印本の刊記と同様のものであろう。

（24）本書は当初三冊本で、各巻の題簽題が別々であった。正確な題簽題は、上巻が「わかみとり」、中巻が「わかたけ」である。なお下巻の題簽題は「うすもみち」である。

（25）前田訣子「女性の書」（『書の日本史』第六巻　一九七五年　平凡社）八〇頁。

（26）ここには多く巾着型のデザインのなかに「妙治」と記した朱印が押されている。この「妙治」は妙躰の別号であろう。

（27）ただし『女教倭文庫』は、享保二〇年（一七三五）刊『見寿乃雪』の改題・増補版（口絵を増補）である。

（28）本書の改題本に明和五年刊『女文章色紙箱』がある。

（29）この種の書籍目録に作者の年齢が付記されるのは、異例中の異例で、後にも先にもこの一例のみと思われる。

（30）大阪図書出版業組合編『享保以後 大阪出版書籍目録』（昭和一一年）二頁「女筆色録」項。

（31）前掲『近世人名録集成』第二巻三三五頁。